

特集 ゆるぎない英語力を育成するために

気づきを重視した音と文字・発音の指導

田邊 祐司 (専修大学)



はじめに

28NCの音声指導に関しては、好評をいただいた24NCの「気づきを重視する」という基本コンセプトを踏襲しながらも、かつ現場の要望に即応した改訂を行いました。Soundsを、今回は「発音とつづり」と「英語らしい音」の2つに分け、それぞれに「気づき」の工夫を盛り込みました。28NCの音声指導の概要を紹介します。

発音とつづり

臆さずに発音する生徒が増えてきたという声とともに、音と文字とのつながり (SLC: Sound-Letter Correspondence) をつかめず、それが発音だけではなく、読解面にも影響を与え始めているという声が多数の先生方から上がっています。

28NCのSoundsでは、小学校の外国語活動で英語音に親しんだ生徒が増加しているという事実を踏まえつつも、こうした現場の声をいち早くすくい上げ、1年から3年まで一貫して、発音とつづりとの関係に終始した活動を盛り込むことにしました。

まず、Book 1の早い段階で、発音とつづりとの関係 (母音字と子音字) の最低限のルールをまとめた見開きのページを新設しました。ここの2の活

2. (1) 下の [] 内の単語を、a, e, i, o, u の発音に注意しながら、表のそれぞれの () に書き入れよう。
 (2) 教科書の中から、書き入れた単語の母音字と同じ発音のものを探して、右側の () に書き入れよう。
 (3) 書き入れた単語を、文字と発音に注意しながら読んでみよう。

[hand face / Japanese tennis / five six / fax home / music hungry]				
アルファベットの名前と同じ発音			アルファベットの名前ではない発音	
A a	()	()	()	()
E e	()	()	()	()
I i	()	()	()	()
O o	()	()	()	()
U u	()	()	()	()

Book 1 p.48 発音とつづり Phonics

動、では、単に「これはこうなっているのだから、そのまま覚えなさい」的な記述は極力避け、ここでも「気づき」という従来コンセプトに基づいた、生徒の認知力に訴える仕掛けを施しています。

このほか、各 Lesson の文法のまとめのあとに Sounds の「発音とつづり」コーナーがあります。

例えば、以下は、「アルファベットの名前と同じ発音」と「アルファベットの名前ではない発音」との違いに生徒に着目させる活動です。

表中の太字の文字の読み方が同じ単語を下の [] の中から選んで () に書き入れ、読んでみよう。そしてつづりと発音のルールについて話し合おう。

a	e	i	o	u
cat	ten	this	dog	hungry
()	()	()	()	()

Book 1 p.56 Sounds

また次の例は、子音結合と呼ばれる、子音と子音がくっついた音声現象を取り上げています。

次の英英辞典の単語の定義を読んで、その単語を書いてみよう。そして、子音字のつながりに注意して単語を読もう。

- 1) the color of the sky on a clear day ... **b** _____
- 2) to move a car ... **d** _____
- 3) the season between winter and summer ... **s** _____
- 4) to begin ... **s** _____

Book 3 p.46 Sounds

発音のみならず、Listeningの上でも、相手が苦勞せず理解できるかどうかの「要」となる役割を担っているのがこの子音結合です。子音間に母音を混入してしまうと、「子音+子音」の音韻のパターンに慣れている欧米人には、「子音+母音+子音」のパターンはとて聞き取りにくいのです。

それぞれ、タスクと呼べるようなレベルではありませんが、それでも「何度も書いて、発音して覚えなさい」という「力業」よりも、認知面への足場づくりとなる内容を目指したものです。

英語らしい音

「英語名人」のひとりであった内村鑑三は、英語の源泉をその発音にあると看破しました。「英語らしい音」、すなわち、ストレス (アクセント)、強弱リズム、イントネーション、音変化などを身につけることが、その他の技能にも大きくかかわることは言うまでもありません。

Soundsの「英語らしい音」のスペースは一見、従来版よりも縮小した感があるかもしれませんが、それは各 Lesson のあとにある Let's Listen と連動させたためです。これはもちろん、聞くという思考活動の中で、英語らしい音へ気づきを起こしてほしいという我々の願いが含まれています。

例えば以下は、数字の弁別がポイントです。

ゲートの番号や	1. Gate 12 - Gate 20 - Gate ()
飛行機の便名の	2. Gate 14 - Gate 20 - Gate ()
英語を聞き、数	3. Gate 15 - Gate 20 - Gate ()
字を () に書き	4. Flight 463 - Flight 527 - Flight ()
入れよう。	5. Flight 186 - Flight 196 - Flight ()

Book 2 p.67 Sounds

14 か 40 か、には天と地ほどの違いがあります。とくにビジネス現場での数字の聞き間違いは、ときに命取りになることがあります。ストレスが置かれた箇所の音質をどれだけ正確にとらえられるかは、ほかならぬ私自身が痛感しています。

もう1つ例を。

次の英文を聞いて、文の終わりを上げて発音している場合には■を、下げて発音している場合には▼をそれぞれ () に書き入れよう。

1. Sorry? ()
2. When is your birthday? ()
3. I have two brothers. ()
4. Do you have any brothers or sisters? ()

Book 1 p.68 Sounds

イントネーションは、これまでの教科書ではあらかじめ表示してあることが多かったようですが、ここでは敢えて生徒に考えさせ、書かせる形を取りました。自分の耳で聞いて、「こうなっている」「なぜ、上がるのか、下がるのか」、さらにはピッチ (音調) 変動にも、「大きなもの」と「小さなもの」があるなどと実感させ、それを表記させてみる、ときには手などでその変化を表させてみることは、英語らしい音の獲得につながりやすいようです。

最後に、了解した音声知識を自動化の段階へと連絡させるのは、まちがいがなく筋肉運動です。日本の

教室の現場において、知識と運動を効果的に連絡させる活動に音読があります。どんどん行っていたきたいと思います。ただし、それも意味を理解したうえで質的な音読活動がのぞましく、口パクではいけないのは自明の理です。この点を踏まえ、各 Lesson の GET の本文および Let's Talk の本文のページ下の余白 (脚注) には、以下のような音読のためのヒントを入れることにしました。

▶ 一番伝えたいことを強めに言おう。
I am Paul. Nice to meet you.

Book 1 p.21 ページ下

各語のストレスを受ける母音の部分を中心に、強弱、ピッチ、母音の長さの変化が起きるといのが音声学的には正確なところなのでしょうが、ここではそうした文言にはあえて拘泥せず、WYSIWYG (What You See Is What You Get) という「生徒目線」での短い tips を心がけました。

例を今、1つあげておきます。

▶ 訂正するときはその部分を強く言おう。
Is he a PE teacher?
— No, he isn't. He is a math teacher.

Book 1 p.33 ページ下

こちらと同じく、平板になりがちな生徒の音読に意味との関連を気づかせる例です。ここは当然、「数学の先生」という情報が強調されるので、math にストレス、ピッチ変化がかかります。

以上、リスニング、音読活動と連動させた、英語らしい音へのアプローチを盛り込んだのが Sounds のもう1つの変更点です。

おわりに

SLC の力と発音力は、英語力の linchpin です。linchpin は車軸から車輪が外れないようにするための重要なピンのことです。そこから「根幹、要」といった比喩的な意味も発展しました。英語の linchpin である音声の力がないと、コミュニケーションというクルマは円滑には進みません。4 技能という4つのタイヤを円滑に回すためにも、28NC でしっかりとした音声の linchpin を生徒に形成させてくださるよう希望してやみません。

【参考文献】内村鑑三 (1988) 「外国語の研究」講談社。

NEGIISHI MASASHI
TAKAHASHI OSAMU
HIDAI SHIGEKI
MATSUZAWA SHINJI
SUZUKI SATORU
KENO OSAMU
KUDO YOJI
IMAI HIROKI
SAKAI HIDEKI
TANABE YUJI
TAJIMA MISAKO